

# じょうこうじ 掟光寺だより

令和7年  
2月号

## 行事案内

●2月5日(水)  
「お日待ち講」

13時30分から



「鬼」ってなあに？

鬼という言葉は元々中国からやってきました。漢字の「鬼」は死体を表す象形文字で、亡くなることを「鬼籍に入る」と表現するのは、人は死んだら鬼になると考えられていたことに由来します。中国では、鬼とは「死者の魂そのもの」で姿形がないものというイメージでした。

今では「鬼」は「き・おに」という呼び名がありますが、中国から入ってきたときは「おに」という

読み方はありませんでした。「鬼」は「おに」という呼び名が定着していったのは平安時代の頃で、仏教思想の影響で、鬼が「地獄の鬼」のような実体を伴う怪物として認識されるようになりました。これらを「この世ならざるもの」という意味「隠(おぬ)」と呼び、さらに「鬼」という名前へと変わってとされます。

この平安時代では人の姿をなして現れる「鬼」として、怨霊の化身であったり、外部から突然やってきて襲ってきたり、人を食べたりする存在として「よく分からない怖いもの」という認識に変わりました。

それが鎌倉時代になると「鬼」は恐れられた存在から「鬼退治の対象」となります。有名なのが大江山の「鬼退治」の話です。酒呑童子は政権に刃向かう勢力の象徴だったと考えられますが、この頃から「鬼」は時の権力に従わない者たちが「退治する対象」となっていく

た。また、能楽の「般若」のお面が代表的ですが、人の苦悩や恐怖が「鬼」の形相となって現れるようになり「鬼」も多種多様になった。そして、江戸時代になると「鬼」は一つの「キャラクター」として妖怪や幽霊とも愛されるようになり、現代まで続くのです。

鬼とは元々は「得体の知れないなにか」と指す言葉でした。それが時代とともに恐怖の対象↓退治の対象↓キャラクターと「鬼」のイメージも時代とともに変わっていったのです。



漢字の「鬼」は元々ツノがない

日蓮宗では鬼の字を書く時、よくツノ無しの鬼を書くことが多いです。これは日蓮宗で祀っている鬼子母神の伝説になぞらえて、「悪さをせず善神になったのでツノが取れた」という理由で説明されることが多いですが、漢字の歴史で見ると少し違うようです。

漢字は中国から来ましたが、中国では紀元前に統一した秦の時代には「篆書体」が使われていましたが、秦の滅亡後の漢の時代では

篆書体を簡略化した「隸書体」が採用されました。「鬼」は篆書体だとツノがあり、隸書体ではツノがありません。隸書体に続いて成立した「楷書体」もツノなしで、元々「鬼」という漢字はツノのない形が長い間当たり前だったわけ

です。それが近代になって日本で活字が作られた時、字体の基準として用いたのが一七一九年の清の時代の中国で刊行された「康熙字典」です。この康熙字典では当時の中国で一般に使われていた文字ではなく、時代を隔てた昔の篆書体を元にした字を採用し、それでツノのある「鬼」が載りました。

日本でも一般には手書きではツノのない「鬼」が使われていたにもかかわらず、ツノのある形で活字が作られました。その結果、明治以降、活字印刷が盛んになるとツノのある「鬼」が主流となり、ツノなしの「鬼」は古い手書き文字にしか見られないようになりまし

た。そこから、活字の鬼した知らない人が増えて、目にしたツノのない「鬼」の理由はなんだと考えた結果、「善神になってツノがとれた」という

つのありつのなし  
鬼 鬼